

ナール、シエナ、フロランス、ヴェニス、獨逸國ミュニッ
ク、コロンニュ、和蘭國ハーゲ、アムステルダム及英國倫敦ヲ
回歴シ各地ノ美術ヲ研究ス

五月十五日 佛國ヨリ歸朝

五月廿九日 復職ヲ命ス 文部省

ただし、十二月二日出発とあるのは新橋駅を汽車で発った日付で
あり、『黒田清輝日記』第二卷（昭和四十二年。中央公論美術出版）に
よれば、この日、久米は校長、職員、生徒、友人、親戚等多数の見
送りを受けて黒田清輝および友人達とともに乗車し、横浜で下車。
予定の乗船切符がとれず、翌日また黒田と汽車に乗り、大磯で乗り
代えて四日に京都有着。以後、黒田の美術工芸取調べに同行し、七日
に京都を汽車で発って長崎に向かい、長崎から仏船オセアニアン号
に乗って出発した。

次に、明治三十二年十一月十五日、本校は「NOTICE SUR
L'ÉCOLE DES BEAUX-ARTS DE TOKYO」（限定本、非売品）
を発行した。これはパリ万国博に文部省出品物の一つとして出品す
るために編集されたもので、校舎や各科教室風景および教官や生徒
の作品を多数掲載し、仏文の解説が付けられている。本学附属図書
館にも一冊所蔵されている。これについて当時の新聞が次のように
報じている。

○美術通信

△△生 「この分大村西崖執筆」

△東京美術學校にては、來る三十三年佛國巴里博覽會へ出品す
るに、經費僅に千圓ばかりにして製作品にては迎も目覺しきもの
出來ざるより、文部省と協議の末同校總覽といふ一書を編纂し、
寫眞版百五十圖を挿み、佛文にて精しくその成績現況等を記述し
て出陳する筈なり、こは陳列のうへ目に立たずとて非難するもの
あれど、此經費にて同校教育の全體を示すには、これに過ぎたる
良策なかるべしと久保田同校長心得は語りぬ

（明治三十二年四月十九日『時事新報』）

○美術學校一覽 東京美術學校が巴里大博覽會の出品へ同校開
始以來の歴史を敘したる書籍にて生徒の製作品中優等のものを刷
出する事一百餘、題して東京美術學校一覽と云ふ、昨今和文脱稿
し更に佛文に譯して來る八月中に成功する都合のよし

（明治三十二年六月十一日『読売新聞』）

⑧ 和田英作の留学

明治三十年七月西洋画科撰科を修了し、同科教場助手（無給）とな
って油画の研究を続けていた和田英作は、岡田三郎助と一緒に国費
留学させるといふ文部省の約束が果たされなかったので、ひたすら
渡欧の機会を待っていたが、黒田清輝の紹介でベルリン博物館のア
ドルフ・フィッシャーとその夫人（同三十一年來日）の日本旅行の案
内をつとめたことが縁となって、その蒐取品の整理のために同三十
二年五月渡欧した。滞欧中に国費留学生任命の手続きをとるといふ
黒田清輝や文部省専門学務局長上田万年の約束があったのである。

ロンドン、スコットランドのミッドルスボロ（ミッドルス・ブルグ）、アントワープを経てベルリンに到着。フィッシャーの処で日本美術品の整理をしているところへ文部省の満三年間仏国留学を命ずという辞令（三十二年十月十三日付。一ヶ年千八百円支給。）が留いたので、翌三十三年三月にパリに移ってアカデミー・コラロッシンに入学した。和田の履歴書（本学蔵）にはこれより帰国までのことが次のように記されている。

〔三十三年〕三月ヨリアカデミー、コラロッシン入學 ラファエル、コラン、クルトア兩氏ニ就キ木炭畫及油畫ヲ修業シ又ユウジェーヌ、グラッセ氏ニ就キ裝飾美術修業

同年 佛國巴里府ニ開設セル千九百年世界大博覽會ニ油畫渡頭夕暮圖ヲ出品シマンシヨンオノラーブル授與セラレ

同卅五年 佛國巴里府開設ノ「サロン」ヘ油畫思郷圖出品ノ許可ヲ受ク

同卅六年二月三日 欧州内地旅行許可ヲ受ケ一ヶ月半佛伊兩國ヲ巡歴ス

七月十五日 歸朝

このフランス留学については和田自ら「畫壇の四十年・足跡を顧みて」（昭和九年九月〜十二月『東京毎夕新聞』に連載）その他で詳しく述べている。最近の研究では留学中の和田、特に滞欧作「こだま」と世紀末画家たちの制作との関係を論じた丹尾安典著「和田英作——世紀末のこだま」（『比較文学年誌』第二十一号、昭和六十三年）がある。

滞欧作の一部すなわち「ミッドルス・ブルグ」、「公園の夕暮」、「思郷」、フラ・アンジェリコ作「受胎告知」模写、ペラスケス作「マリアナ公女」模写、グルーズ作「少女」模写、ミレー作「落穂拾い」模写は帰国後東京美術学校に収蔵された。

和田は帰国後、明治三十六年十月十四日に本校教授となったが、同月一日の『読売新聞』に

○美術學校の新學科 同校洋畫科にてハ今期より新に速寫畫法を教授する計畫成れり 教師ハ新歸朝の和田英作氏なり

という記事があり、「速寫画法」つまりクロッキーが和田の指導で始められたことがわかる。西洋画科では明治三十六年に授業方法を改め、第二年以上に鉛筆による人物姿勢の速写と水彩画を正式な履習項目として課すことになった。また、和田の帰国が本校内外における図案振興の一助ともなったことは157頁に記すとおりである

⑨ 小坂象堂の死去

明治三十二年六月二日、西洋画科助教小坂象堂（本名力松）が死去。浅井忠その他によって葬儀が営まれ、日暮里の青雲寺に埋葬された。象堂は但馬出石の出身で、明治二十年から京都で南宗画、円山派を修め、陶画を描くなどしていたが、同二十七年から浅井忠と西洋画を学び、傍ら日本画の勉強を続けた。彼は浅井が本校教授となったとき（同三十一年）に、助教教授に選ばれ、日本絵画協会や日本美術協会に力作を出品。革新派の日本絵画協会といわゆる理想派が